

# 研究員の眼

## 若年層の金融機関・商品に対する考え方～4つの志向が存在

生活研究部門 研究員 久我 尚子  
 (03)3512-1846 kuga@nli-research.co.jp

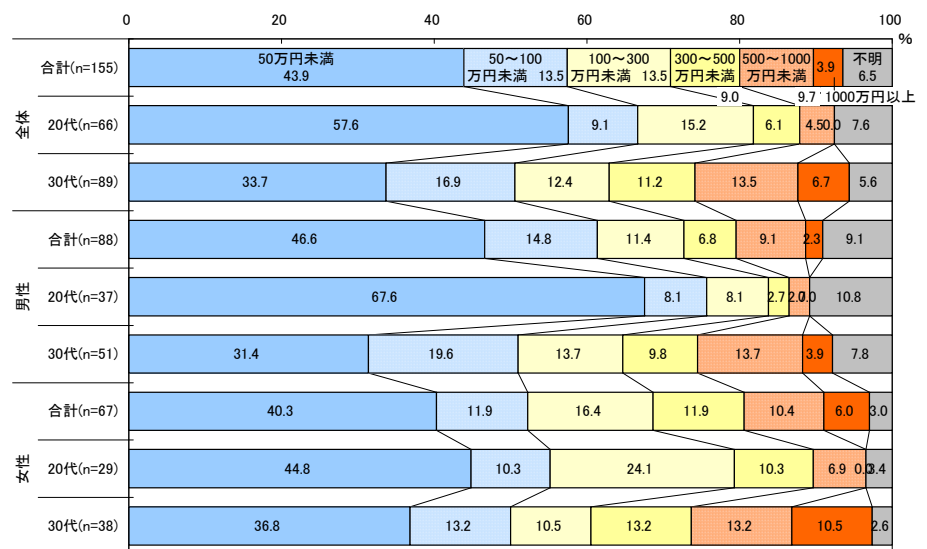
新しい年を迎え、年間の家計予算の計画を立てる方も多いのではないだろうか。

現在の若年層は日本経済が低迷する中で育ち、雇用情勢も厳しいために、貯蓄志向や節約志向が強いという論調が多い。実際のところ、どれくらいの預貯金を持ち、金融機関や商品に対してどのような志向を持つのだろうか。手元にあるデータで簡単に分析してみた。

20～30代の仕事を持つ未婚男女の預貯金残高をみると、いずれの層でも50万円未満が最も多く、20代では57.6%、30代では33.7%を占める(図表1)。50万円未満は特に20代の男性で多く67.6%に及ぶ。20代と30代を比べると、やはり年収水準の高い30代の方が預貯金残高の高い割合が多い。300万円以上をみると、20代では1割に過ぎないが(10.6%)、30代では3割を超える(31.5%)。また、男女を比べると、20代では圧倒的に女性の方が多く、30代では50万円未満は女性の方がやや多いものの、300万円以上は男性では3割に満たない一方(27.5%)、女性では4割近くに及ぶ(36.8%)。

さらに、金融行動において、どのような志向を持つのかを見るために、22項目の金融機関や貯蓄・投資商品に対する考え方や利用方法についての調査結果について、主成分分析<sup>1</sup>を用いて分析した(図表2)。その結果、4つの成分に要約されることが分かった。それぞれの成分に属する項目の主成分負荷量の大きさか

図表1 20～30代の仕事を持つ未婚男女の預貯金残高



(注意) 分析対象は20～30代の仕事を持つ未婚男女で銀行やゆうちょ銀行、農協などの普通貯金、通常貯金、普通貯金を持つ者

(資料) 株式会社日経リサーチ「金融行動調査(2011)」から、筆者作

<sup>1</sup> 主成分分析とは多くの特性を持つ多変量データの情報をなるべく落とさずに少ない量の特性値に要約する多変量解析手法

ら、1つ目の成分は金融知識の高さや情報収集の積極的さに関する項目で主成分負荷量が大きい  
「金融リテラシー重視」志向と理解することができる。同様に、2つ目はより良い商品・サービスを  
求め、リスクより収益性を重視する「収益性重視」志向、3つ目は貯蓄を好み元本保証を重視する「安  
全性重視」志向、4つ目は人や専門家への相談ニーズが高い「専門家への相談重視」志向と読み取れ  
る。

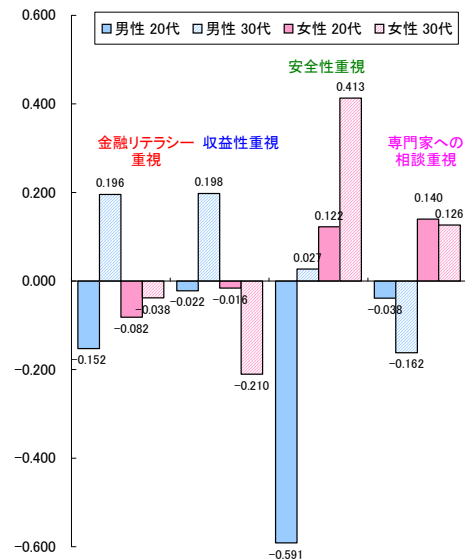
図表 2 20～30代の仕事を持つ未婚男女の金融機関・商品に対する考え方の主成分分析結果（主成分負荷量）

	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分
	金融リテラシー重視	収益性重視	安全性重視	専門家への相談重視
金融商品については、他人より詳しいほうだ	0.804	0.326	-0.012	0.097
金融商品や金融機関について、人からよく聞かれることがある	0.801	0.032	0.063	0.101
金融商品の専門用語を理解できる	0.784	0.254	-0.081	0.152
新聞・雑誌の記事や広告などで貯蓄や投資の情報を積極的に得るほうである	0.755	0.220	0.161	0.054
よい金融商品・サービスがあれば積極的に利用を考えるほうである	0.665	0.353	0.279	0.076
金融商品の購入タイミングについて、経済動向等をにらんだ上で判断できるほうだ	0.652	0.240	0.130	0.171
資産運用について関心がある	0.523	0.498	0.282	0.229
よい商品・サービスがあれば外資系金融機関でも取引を考えたい	0.256	0.784	0.106	0.206
よい商品・サービスがあれば新規参入した金融機関でも取引を考えたい	0.229	0.782	0.120	0.166
資産運用で利用する金融機関は、電話やインターネットなどで取引ができれば、支店が近くになくてもかまわない	0.043	0.712	0.228	-0.068
多少のリスクがあっても、収益性の高い貯蓄・投資商品を利用したい	0.461	0.699	0.042	-0.008
ある程度以上の資産ができれば、資産の総合的な運用や管理は専門家に委託したい	0.062	0.538	-0.069	0.533
どちらかというと「消費型」より「貯蓄型」である	0.282	0.070	0.677	-0.102
少しでも元本割れの可能性があれば、たとえ高収益が期待できるとしても預け入れ・投資を考えないほうである	-0.206	-0.005	0.675	0.229
預入（投資）金額によって利回りやサービスを優遇されるのは当然だ	0.001	0.365	0.664	0.124
貯蓄や投資、保険などの金融商品の仕組みや利用方法について、もっとよく知りたいと思う	0.304	0.277	0.608	0.313
資産運用はじっくり人と相談しながら考えたい	-0.054	0.048	0.213	0.834
将来的な人生設計や老後の備えを含め、資金計画について専門家に相談してみたい	0.426	0.114	0.231	0.564
金融機関からの商品やサービスに関する情報提供が不足していると思う	0.405	0.075	0.416	0.300
将来を考えると、預貯金などのリスクのない運用だけでは不安だ	0.335	0.388	0.227	0.295
資産運用についていろいろ知識を身につけるのはおっくうだ	-0.582	0.012	0.015	0.270
預入（投資）金額に応じて、支店窓口での応対も優先的に行われるべきだ	0.440	0.393	0.284	-0.108
累積寄与率	36.998	47.596	54.496	59.983
固有値	8.140	2.332	1.518	1.207

（注意 1）分析対象は 20～30 代の仕事を持つ未婚男女で銀行やゆうちょ銀行、農協などの普通貯金、通常貯金、普通貯金を持つ者  
（注意 2）それぞれの項目について「はい」「どちらかといえははい」「どちらともいえない」「どちらかといえはいいえ」「いいえ」の 5 段階  
で尋ねて得た結果を 5～1 の数値に置き換えて主成分分析を実施  
（資料）株式会社日経リサーチ「金融行動調査（2011）」から、筆者作成

また、性年齢階層別にどの主成分の影響が大きいのかを把握するために、それぞれの主成分得点を見ると、20 代男性ではいずれの得点も低い（図表 3）。これは預貯金が少ないために、いずれの志向も弱いということだろう。一方、比較的、預貯金の多い 30 代男性は「金融リテラシー重視」「収益性重視」志向が強い。女性はいずれの年代でも「安全性重視」「専門家への相談重視」志向が強く、預貯金の多い 30 代では「安全性重視」志向が非常に強い。つまり、預貯金のある 30 代では、男性は収益性を重視、女性は安全性を重視した運用を好む様子が窺える。  
実態をより詳細に把握するためには、更なる分析が必要だが、本稿の分析で 20～30 代の仕事を持つ未婚男女の預貯金状況と 4 つの志向の存在、男女の志向の違いを把握することができた。

図表 3 各主成分に対する主成分得点の平均値



（注意）主成分得点が高いほど各主成分の影響が大きい

若年層では貯蓄・節約志向が強いという論調は多い。しかし、個人の預貯金状況や性別によって金融行動の志向は異なることを念頭に置き、各層に対して適切なアプローチを図ることが肝要だ。